

令和6年度卒業時アンケート調査の結果について

令和7年4月18日

函館大谷短期大学教学マネジメント委員会

令和7年3月14日に卒業した函館大谷短期大学卒業生を対象に実施した卒業時アンケート調査（短大での学びに関するアンケート）についての調査結果及び分析を以下に示す。

1. アンケート回収数及び回収率

アンケート回収数 49（内訳：ビジネス情報学科16, こども学科33）

アンケート回収率 100%

2. 学生の課程全体を通じた成長実感

学生の課程全体を通じた成長実感について、成長した5－どちらともいえない3－成長できなかった1の5件法で質問した。

○ 全体平均4.3（ビジネス情報学科4.3, こども学科4.3）

全体平均から考えると、本学卒業生は本学の教育課程全体を通じて、自らの成長を感じているものと考えている。

3. 学生が成長を実感する観点について

3-1 ディプロマポリシーとの関連から

学生が本学の教育課程全体を通じて成長したことについて、本学ディプロマポリシーを基に、8つの選択肢を示し、当てはまるものすべてに○をするよう求めた（表1：学生に提示した選択肢と本学ディプロマポリシーとの関連）。

大学全体、ビジネス学科及びこども学科の総数に対する回答者数の割合を表2に示す。

表1 学生に提示した選択肢と本学ディプロマポリシーとの関連

学生に提示した質問項目	質問項目に対応する本学ディプロマポリシー
①様々なことに関心がもてるようになった	主体的に地域・社会にかかわっていくための関心が育まれたか
②様々なことに意欲が湧くようになった	主体的に地域・社会にかかわっていくための意欲が育まれたか
③ひととして成長した	主体的に地域・社会にかかわっていくための人間性が身についたか
④色々な知識を身に付けた	身に付けた知識を十分に自覚することができたか
⑤自分の知識が発揮できるなどと感じることができた	身に付けた知識を地域・社会において適切に発揮できたか
⑥自分のよさが実感できるようになった	自分のよさや成長に目を向けることができたか
⑦自分のやりたいことが見つかった	地域・社会のために貢献するための自らの目標を見いだすことができたか
⑧その他	

表2 学生が成長を実感する観点1

大学全体、ビジネス情報学科及びこども学科の総数に対する回答者数の割合(%)

本学ディプロマポリシー	大学 全体	ビジネス 情報学科	こども 学科
①主体的に地域・社会にかかわっていくための関心が育まれたか	40.8	43.8	39.4
②主体的に地域・社会にかかわっていくための意欲が育まれたか	18.4	12.5	18.2
③主体的に地域・社会にかかわっていくための人間性が身についたか	42.9	37.5	45.5
④身に付けた知識を十分に自覚することができたか	51.0	68.8	39.4
⑤身に付けた知識を地域・社会において適切に発揮できたか	8.2	0.0	12.1
⑥自分のよさや成長に目を向けることができたか	12.2	12.5	12.1
⑦地域・社会のために貢献するための自らの目標を見いだすことができたか	34.7	31.3	33.3
⑧その他	0.0	0.0	0.0

本学ディプロマポリシーに対応させた8つの項目について、令和6年度の大学全体として、以下の特徴がある。

- ・ 関心や人間性が4割前後(表2 ①③)
- ・ 知識の自覚(④)は5割超だが、知識の発揮(⑤)は1割未満(表2 ④⑤)
- ・ 自分のよさや意欲に関する回答率が低め(表2 ②⑥)

また令和5年度と比べると、関心や人間性の数値がやや下がっている。ただ、学科構成が変わったこともあり、単純比較は難しい。

3-2 学科の特性の視点から

ビジネス情報学科及びこども学科の全回答数に対する各項目の回答者数の割合を表3に示す。

表3 学生が成長を実感する観点2

ビジネス情報学科及びこども学科の全回答数に対する各項目の回答者数の割合(%)

本学ディプロマポリシー	ビジネス 情報学科	こども 学科
①主体的に地域・社会にかかわっていくための関心が育まれたか	21.2	19.7
②主体的に地域・社会にかかわっていくための意欲が育まれたか	6.1	9.1
③主体的に地域・社会にかかわっていくための人間性が身についたか	18.2	22.7
④身に付けた知識を十分に自覚することができたか	33.3	19.7
⑤身に付けた知識を地域・社会において適切に発揮できたか	0.0	6.1
⑥自分のよさや成長に目を向けることができたか	6.1	6.1
⑦地域・社会のために貢献するための自らの目標を見いだすことができたか	15.2	16.7

⑧その他	0.0	0.0
------	-----	-----

ビジネス情報学科においては、「身に付けた知識を十分に自覚することができたか(表3④)」が33.3%とかなり高い。学内で身に付けた学習内容を把握できている学生が多いと考えられる。また、「主体的に地域・社会にかかわっていくための関心が育まれたか(表3①)」が21.2%と全体平均より高め。授業や地域活性化プロジェクト等の教育効果が出ている可能性がある。一方で、「身に付けた知識を地域・社会において適切に発揮できたか(表3⑤)」と感じる学生がいないのは、まだ自分の学びを社会で活かす必要性を強く意識していない可能性がある。

こども学科においては、「主体的に地域・社会にかかわっていくための人間性が身についたか(表3③)」の数値(22.7%)が全体よりやや高い。子どもと接する場面や実践的な授業が多いため、「身につけたことを実際に活かせた」と感じる学生がいて考えられる。しかし、「身に付けた知識を十分に自覚することができたか(表3④)」は19.7%で、全体と比較して低め。学びを言語化し、整理する機会を増やすことで、さらに高まる可能性がある。

4. 学生の成長を促す教育活動

学生の成長を促す本学の教育活動について評価するために、本学が学生に対して用意している教育活動や、成長に関連しているであろうと考えられる活動に関する選択肢を示し、当てはまるものすべてに○をするよう求めた。大学全体、ビジネス情報学科及びこども学科の総数に対する回答者数の割合を表4に示す。

表4 学生が認知している成長するきっかけとなった経験
大学全体、ビジネス情報学科及びこども学科の総数に対する回答者数の割合(%)

成長するきっかけとなった経験	大学全体	ビジネス 情報学科	こども学科
①講義を含む勉強	49.0	68.8	39.4
②本学教職員とのかかわり	34.7	31.3	36.4
③資格取得	28.6	25.0	30.3
④サークル活動・学友会	20.4	18.8	21.2
⑤ボランティア活動	6.1	6.3	6.1
⑥友人関係等	38.8	43.8	36.4
⑦アルバイト	36.7	31.3	39.4
⑧実習・インターンシップ	32.7	56.3	21.2
⑨就職活動	0.0	0.0	0.0
⑩学内行事等	10.2	12.5	9.1
⑪その他	0.0	0.0	0.0

大学全体として最も多いのは、講義を含む勉強(表4①)49.0%である。学生が学内の授業を通じて成長を感じている様子がうかがえる。友人関係やアルバイト(表4⑥⑦)も4割前後で、学外の経験から得られる学びを大切にしている学生も多い。実習・インターンシップ(表4⑧)32.7%も一定数の学生が

挙げっており、実践的な活動が成長につながっていると考えられる。本学教職員とのかかわりは 34.7% で、令和 5 年度 (46.2%) よりは下がっているものの (表 4 ②), 3 割以上の学生が教職員とのやりとりを成長のきっかけと認識しているので、教員のサポート力は引き続き重要といえる。

ビジネス情報学科においては、講義や実習など、学内外の学習機会を非常に重視している傾向がある (表 4 ①⑧)。特に講義 (68.8%) は全体平均 (49.0%) を大きく上回っており、座学での学びが自分の成長に直結したと感じる学生が多い。また、実習やインターンシップ (56.3%) の数値も高く、学内で学んだ知識を外で試す機会を通じて、さらに成長を実感していることがうかがえる。

こども学科においては、講義 (39.4%) が最も高いが、ビジネス情報学科ほど突出していない (表 4 ①)。代わりに、友人関係やアルバイトなど、日常的なかわりや経験を通じて成長している学生が多い (表 4 ⑥⑦)。また、教職員とのかかわり (36.4%) もビジネス情報学科 (31.3%) よりやや高めである。学科の特性上、実技や実習科目で教員と密にやりとりする場面が多いからかもしれない。

まとめると令和 5 年度と比較して、令和 6 年度はビジネス情報学科での座学と実践の重視が特に目立ち、こども学科では友人やアルバイトを通じた学びが印象的である。学生それぞれがどの活動を成長要因と捉えているかを踏まえ、今後も学科特性に合った支援策を検討する。

5. 学生の課程全体を通じた満足度

学生の課程全体を通じた満足度について、満足している 5—どちらともいえない 3—満足していない 1 の 5 件法で質問した。

○ 全体平均 4.1 (ビジネス情報学科 4.2, こども学科 4.0)

平均から考えると、本学卒業生は本学の教育課程全体に対してある程度満足しているものとする。